

対魔忍

NEAR FUTURE KUNOICHI ADVENTURE  
TAIMANIN ASAGI 3

アサギ



淫獄都市の雌忍

立ち読み版

原作 Anime LiLiTH

小説 Kyphosus

表紙 カガミ

挿絵 竜胆



第1話

魔虐のはじまり

006

第2話

刻印闘奴アサギ

069

第3話

アサギ先生の恥蜜授業

132

第4話

雌忍達の狂宴

197

エピローグ

279

## 登場人物紹介

Characters



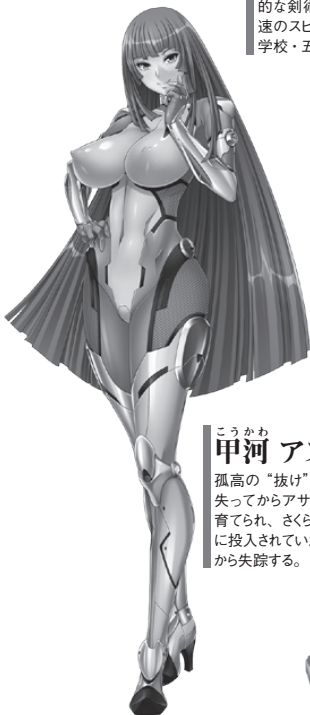
### い が わ 井河 アサギ

対魔忍を率いる隊長にして最強の対魔忍と目されているクノール。天才的な剣術と体術、人知を超える光速のスピードが武器。対魔忍養成学校・五車学園の校長も務める。



### こう か わ 甲河 アスカ

孤高の“抜け”対魔忍。両親を失ってからアサギに引き取られて育てられ、さくらや紫とともに任務に投入されていたものの、あるときから失踪する。



### おぼろ 朧

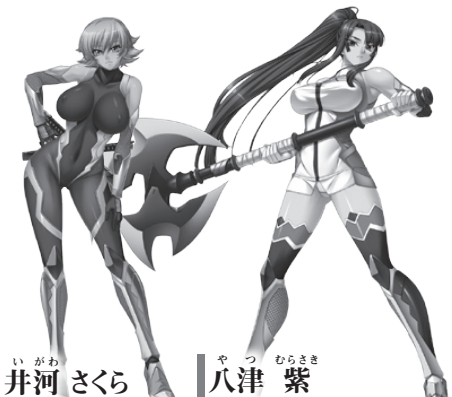
ノマド創始者エドウィン・ブラックの先兵。アサギに対し強烈な敵意を見せる。

### フルスト

魔科医。ブラックに従うノマドの参謀。

### さわ き こうすけ 沢木 浩介

アサギの婚約者だった沢木恭介の弟。兄の死後、アサギによって育てられた。



### い が わ 井河 さくら

アサギの妹で明るく陽気。紫と同様、五車学園で教師を務めている。

### や つ むらさき 八津 紫

次代の対魔忍隊長と将来を嘱望されるクール美女。五車学園で教師も務める。

にやにやとサディスティックな笑みを浮かべるこの女こそ、ブラックの腹心の部下であり、過去にもアサギを苦しめてきた裏切り者の対魔忍、隴だった。

「毎回、逃げる豚を捕まえるのも大変なのよ。こう見えても私は忙しいんだからね」

「捕まえた？ 私に貴女に負けた覚えはないんだけど。上司のブラックの手を煩わせておきながら、自分の手柄のように言うのは、不興を買うわよ」

隴の笑いは一瞬にして消え、鬼のような憎悪の形相に変わる。

ビシィッ！

「……っ……！」

容赦のない鞭を浴びてきた。骨まで軋む衝撃が、囚われの対魔忍を襲う。

「豚っ！ この豚がっ！ 誰が口を利いていいと言った！」

バシユッ、ドシユッ……！

二発、三発、四発。続けざまに鞭打たれ、皮膚と筋肉が激痛に悲鳴を上げる。だが、歴戦の対魔忍にとって、苦痛を耐えることは容易かった。

「鞭打ちの楽しみは、調教後に取っておくのが良いのでは？」

効果の薄さを見て取ったか、研究員が口を挟む。

「フン……いいわ。それより、お前に自分の立場を教えてあげる。ここはヨミハラ。我らノマドが東京地下に築いた魔界都市よ。ここから逃げられるなんて思わないことね」

隴は眉根を顰めながらも鞭を止め、アサギに宣告した。

「このヨミハラで、今度こそお前は、豚に相応しい惨めな最期を遂げることになるのよ。」

楽しみにしてなさい。まずは、催眠刻印を施してあげる」

「……催眠刻印？」

その問いには研究員が答えた。

「脳髓や神経系を調整して、支配者に絶対服従するように改造することです」  
「なっ……」

自分の身体に施されようとする邪悪な改造に、アサギは密かに戦慄した。

朧はパチンと指を鳴らす。すると、人間がすっぽり入りそうな大きなガラスシリリンダーを乗せた台車が自走してきて、二人の背後で止まった。

「見なさい。この最新式の装置なら、侵襲は最小限で副作用もなく、数時間で刻印完了するわ。危険な全身麻酔もいらないし、すぐに普通の生活に戻るの」

朧は人体改造マシンを向いて説明する。シリリンダーの中には、ステンレスのアームや、呼吸チューブ、カテーテルなどが配置されているのが見える。

「これからは衛生的で負担の少ない技術がどんどん主流になっていくのね。古い常識に囚われず、常に新しい情報を学ぶことが、受ける側にも必要よ」

と優しい声で言うてから、朧は振り返った。

その頬には悪意に満ちた笑いがにたと張り付いていて、目は三角につり上がり、開いた真っ赤な唇から飛び出した舌は蛇のようにくねっている。

「……なあってイイモノ、お前に使うと思った？ ヴァーカ、豚はコレよ!!」

ガタンッ！

アサギを拘束している鉄柱の周囲の床が、落とし戸になって開いた。そして。  
ドバァッ！

中から飛び出してきたのは、凄まじい量の触手の群れだった。

生臭い湯気を立てる触手達は、吸盤を備えたもの、先端に口のついているもの、無数の剛毛が密生しているもの、鉤爪状、蕾状というろだ。

「こいつで！ こいつらで！ お前を、一週間かけてたゝつぷり雌豚調教しながら刻印してあげる！ アハッ、アハハハハハッ！」

百人以上の、獲物を求めてうねうね動く触手達を前にして、臃は高笑いする。その後ろから、研究員が進み出ると眼鏡を外した。

「これは、私の魔界医術の粹を集めて作り上げた傑作なんですよ、アサギさん」  
白衣の姿がみるうちに変化していく。丸々と肥えた醜い、忘れえぬ姿へと。

「き、貴様は……フルスト！」

愛する者を略奪した憎むべき魔族の姿に、アサギは憤怒を抑えきれなかった。

「ククク……その節はどうも。私は、この触手で一週間調教すれば、催眠刻印などなくても雌豚に仕上げる自信があるんですが、臃さんが慎重派でしてね」

「浩くん……貴様、浩介はどうしたっ!？」

アサギは眦をつり上げ、口元を歪めて叫ぶ。

「浩介？ あの小僧ですか？ それならここに」

にやにや笑いながら、フルストはどこからともなく肉塊を取り出した。

「アサギさんがこの調教でちゃんと豚になれたら、この小僧も解凍して、一緒に家畜として飼育して差しあげてもいいですよ。最近の人間界は、農業がブームらしいじゃないですか。私もちよつとやってみようかと思ひましてね」

「つ……この外道めっ……!!」

動かぬ肉塊を手に嘲るフルストを、アサギは射殺さんばかりの眼光で睨みつける。

「あるいは、この小僧からボイスサンプルをもつと沢山取って、炎の棘の効果で自在に操作するのも面白いかも知れませんか、アサギさん」

魔科医の言葉を臍が遮った。

「そういう個人的な趣味は却下よ、フルスト。それよりアサギ、お前はのたうち回って、一週間耐え抜きなさい」

臍はもう一度指を鳴らす。すると、触手達がアサギに向かって一斉に鎌首をもたげた。

「そうしたら、たつぷり絶望を味わわせて、最後に一番惨めな方法で殺してあげる。ブラツク様は閻奴とおつしやつてたけど、いずれお飽きになるでしょうからね。アハハッ」

「……貴様らっ……必ず、滅ぼしてやるっ……」

胸の中で煮えくり返っている怒りを、アサギは吐き出す。

ズルルルッ……!! ヌボボボボッ……!!

彼女の怒りなど気にも留めずに、触手の大軍が襲いかかってきた。粘液まみれの軟体生物がアサギの足に、首に、胸に、腰に、絡み付きずると這いずる。撥水加工を無効化されているのか、忍服に粘液が染み込んで至る所に黒い滲みが生じる。

（くっ、こんな触手ごときで……ううっ……何なの？ ……身体が熱いわ……）

粘液まみれにされながら、アサギは異変を感じていた。着衣越しであっても、触手の触れた皮膚に、疼くような切なさが生じつつあるのだ。

「まずは準備運動といきましょう。そいつらの分泌する粘液には媚薬作用がありましてね、たつぷり全身に擦り込んであげますよ。ククク……」

「ふん……こ、こんなモノ、効いてなどないわ」

アサギは身体の奥にじわじわと広がる、熱くやるせない疼きを堪えつつ睨み返す。

「おやそうですか？ ではその、尖ってるのは何ですかね、クククッ」

「あらあら、随分ご立派な乳首とクリちゃんじゃない。よく育ってるわよ」

いやらしい笑みを顔に張り付けて揶揄する二人。

「……っ！」

アサギは自分の身体に生じている欲情を指摘され、思わず顔を赤らめた。豊かな乳房の先端と引き締まった両脚の間で、忍服がぐつきりと持ち上げられている。

乳首は親指の先ほど、勃起クリトリスは小指ほどもあるのが、布越しに見て取れた。

「クク……格好つけてみても、虐められて気持ちよくなっちゃう豚ちゃんなのよね♪」

「ふむ、この程度では物足りないですか？ では……」

ビシイッ！

「……ひゃうっ！」

恥辱に歯ぎしりしていたアサギは、不意に甘い衝撃に貫かれて小さな悲鳴を上げた。小



触手の一本が鞭となって、勃起状態の肥大淫核を打ったのだ。

パシッ！　ピシッ！

「あひっ……！！　んくっ……！！」

鞭触手はスナップを利かせて打ち続け、その度に高圧電流のような鋭い恥悦がアサギの身体を走り抜ける。ひとしきり悶えさせてから、魔科医が言った。

「まだまだいけそうですね。媚薬を追加しましょう」

すると、新手の触手が数本、アサギの両乳首と股間に接近した。その先端の皮がぬるりと剥けたかと思うと、中からサソリの尾のような針が伸びてくる。

「媚薬粘液を直に注射して差しあげます。その、馬鹿みたいに膨れた突起物にね。クク」

「なっ、何だっ……あひっ……！！」

ぷすっ、ぷすぷすっ……

触手達は針をアサギの勃起乳首とクリトリスに突き立てた。忍服を貫通し、皮膚を穿つて、冷たい針がすっかり鋭敏化した海綿組織に潜り込んでいく。

ちゅううううつつつつ……

微かな痛みとともに、禍々しい熱を帯びた液体が、血管に押し込まれてくる。

「くっ……これしきでっ……はっ、ああっ……」

どくっどくっどくっどくっどくっ！

注入を終えた媚薬針が抜けるのと同時に、アサギの心臓が早鐘のように打ち始めた。全身の皮膚がどうしようもなく疼き、魂が焼け付きそうな憔悴感が、血管の中を駆け巡り始

める。視界がピンク色に染まり、ぐるぐると回転し始める。

(だ、大丈夫……この程度、今までだつて……)

宥めるように自分に言い聞かせる。過去、幾度となく過酷な陵辱を受けたアサギにとつて、こうした疼きは既知の感覚ではあった。だがその経験は、責め苦に耐える自信の源というよりも、快楽を受容しやすい淫らな肉体を思い出させる不安要因であつた。

「準備運動を続けます。まずは、『雌食みの妖蛆』」

アサギの乳首と股間に、今度は先端に口のある触手が三本、這い寄ってくる。触手がきい、と鳴いて口を開くと、そこには無数の小さな歯が生えていた。

かりかりっ、こりこりこりっ……

無数の歯が、薄布越しに勃起海綿体を食み始める。突き立て、引つ掻き、噛み砕く。

「ひっ、やめっ……かひあああああ……!!」

媚薬を流し込まれたばかりの過敏な部位を三カ所同時にキツく刺激されて、アサギの全身に高圧電流のごとき快楽が走り回った。

こりゆこりゆっ、かりかりかりっ……

強烈な刺激にアサギは、身体をがくがくと震わせるが、触手達は勃起を逃すことなく、執拗にうねうねと蠢いて甘噛みを続ける。

そして、性感帯への甘噛みに苦悶するアサギの目の前に、新手の、歯ブラシのような剛毛を密生させた触手がこれ見よがしに現れた。

(な、何？ まさかあれで、私のアソコを擦る気!? 今そんなことされたら、あ、ああ)

ブラシ触手が下腹部へと降りていくのを見て、アサギは息を呑む。

ざりっ、ざりざりっ……

「っあああああ……こ、これっ、あああああ……きつ、きくうううっ!!」

拘束された肢体を仰け反らせ、悲鳴を上げる。予想に違<sup>たが</sup>わず、歯ブラシ触手が彼女の発情肉裂に毛先を当て、磨き立て始めたのだ。

ざしゅっざしゅっ、ざりゅりゅっ……

充血しきった肉唇を無数の剛毛がつつき、強く弱く引つ搔いていく。その度に狂おしい疼きが生じては粘膜の下で燃え上がり、アサギを責め苛む。

こりこりっ……かりこりっ……

ざりゅりゅっ……ざすざすっ……

触手達による逃れようのない苛烈な刺激は、飽きることなく繰り返されて、絶頂させることなしに彼女をひたすら追い詰めていく。

（あくううっ……こ、この程度……っ……た、耐えるっ！ 耐え抜いて、必ず浩くんを助ける！ あいつらを、ブラックを倒す……ううっ!!）

がちがちと鳴りそうになる歯を食いしばりながら、アサギは愛する浩介を想って、誓いに縋りついた。

「ふふ、いい表情じゃないの。悔しさと快楽の入り交じったその顔。ゾクゾクするわあ」

「かなり強めの刺激に設定しているので、普通の雌であれば逆に感じないのですが、こうまで喜んで頂けるとは……さすが、対魔忍頭領は格が違いますね」

嘲りの言葉が、虜囚の美女の耳に突き刺さる。

「……んひうつ……くつ……あああああつ！ はあつ、はあつ……んくうんんつ！」  
噛まれる度に乳房の中に堪え難い疼きが充満していく。梳くしられることに恥丘の裏で狂おしいほどの切なさが渦巻く。それは、叶うことなら、乳首とクリトリスを引き抜いてしまいたいほどの魔悦だった。

そして彼女の雌肉器官は、意思に反して、熱く太い侵入者を求め身悶え始めていた。

（あううつ……耐えるっ、耐えなきゃっ！ こいつらには、絶対に負けられないから！  
ああでも、こんな……っ……ほ、欲しいっ!!）

甘噛みとブラシ責めでアサギをたつぷりと憔悴させた後で、触手の飼い主は言う。

「ではそろそろ、お待ちかねの本番と参りましょう。まずは、『嘲笑う黒い鉤爪』」

先端に一对の鉤爪を鉄はさみのように生やした触手が、カチカチと刃を鳴らしてアサギの下腹部に近づくと、忍服の股間をさつくりと切り裂いた。裂けた布地の間から、粘液を噴き零してひくつく、充血肉花あらわが露になる。

「あら可哀想。こんなべとべとに涎を零しちゃって……お預けが過ぎたんじゃない？」

「それは失礼いたしました……では、『背徳で花開く蕾』」

今度は数本の太い触手がアサギの前に現れた。直径七、八センチくらいだろうか。先端を緩んだ皮膚で覆われた姿は、蕾のように見えなくなかった。

（こ、今度は何……?）

蕾触手の包皮がずるずると後退する。その下から、ペニスに似た赤紫色の頭部が、異臭

とともに現れた。本物との違いは、幹にイボ状突起が多数並んでいることだ。

触手の亀頭は鎌首をもたげると、アサギの剥き出しの淫裂に狙いを定めた。

（あ、ああ、来る……アレが、来るっ！ こいつ……私を犯す気なんだわ！）

意図を察して、アサギの鼓動が速まった。触手がもたらすであろう責め苦を想像して、思わずぐくりと喉を鳴らしてしまう。

ぬぢゅ……ぬりゅりゅりゅりゅうっ！

触手ペニスは股間に取り付くと、充血花弁を押し広げて、一気に潜り込んできた。

「は、入ってくるっ！ 来たっ……あっ、イボがつ、あっ、あ、あひあああああっ！」

彼女の予想通り、いやそれ以上に暴力的な快楽の奔流が身体を突き抜けた。今まで、媚薬と前戯にたっぷり弄ばれていたのだ。そのせいですっかり飢餓状態の肉襞が太い亀頭で掻き分けられて、否定し難い歓喜が身体の奥からわき上がってくる。内心の動揺を表すかのように、歴戦の美女の腰回りの柔肌がうち震える。

「あくっ。ううっ……はっ、はあっ……こ、この程度でっ、この私が屈するものかっ！」

自分に言い聞かせるかのように呻く。だが、充血しきった媚粘膜を多数のイボで擦り立てられて、アサギの意思力は急速に愉悦に侵食されつつあった。

「あらあら、気持ちいいのをそんなに我慢しなくてもいいのに。お前がチンポ大好きな淫乱雌豚だっことは、周知の事実なんだからね」

「フフ、アサギさんは、一本では到底物足りないでしょうね。でも大丈夫ですよ。ほら」

「あ……そ、そこはっ、あっ……や、止めろっ！」

快樂に身震いするアサギは、手つかずだった肛門にもぬらつく存在を感じて叫んだ。

ぎゅぢゅ、ぬぶぶぶぶつ！

逃げることも抵抗することもできない虜囚の裏門で、触手が回転し始めた。ドリルのように括約筋をこじ開けて、腸内へと侵入してくる。

「うあ、に、二本同時なんてっ、あうっ、うあああああつつっ！」

肉の門をごりごりと挟り抜かれ、直腸を無遠慮に搔き回される恥悦に、アサギの理性は大きく揺らいだ。

ぬぶりゅりゅっ……ぎゅむむむっ……

前と後ろに入り込んだ触手同士が、肉越しにぐりぐりとぶつかり合う。膣粘膜と腸壁が太い海綿体で圧延され、イボ突起で揉みしだかれる。乳首やクリトリスに食らいついた触手の甘噛み攻撃も依然続いている。前後の熾烈な快樂の挟み撃ちに、アサギは拘束された四肢を、腹筋と背筋を痙攣させた。

（くっ、ううっ……これしきのことっ、浩くんを、助けるまではっ！）

彼女は犬のように喘ぎながらも、意思力をかき集めて理性を立て直そうとした。だがまだ、未使用のペニス触手は何本も残っているのだ。

みぢっ、みりみりみりっ……

まずは一本が、既に塞がれている肉路に無理矢理侵入し始めた。

「えあ、あひっ……む、無理っ、二本同時なんてっ無理っあああああっひぎあっああっ!! うぎっ、ぎっ、ぎはあっ……え、あ、さ、三本んんっ……!!」



「チンポ欲しそうにひくついてやがる、ははっ」

忍服は破られたままなので、剥き出しの白い尻が天井に向けて差し出されており、狭間には鮮紅色の淫裂が息づいている。先ほどの戦闘陵辱の余韻で、そこはまだ充血し、ぬかるんだままだ。

「ぐふふふ、俺が着席番号一番だぜ」

一人の男がチケットを見せびらかしながら進み出て、股間越しに見下ろしてきた。アサギの頬は血が上ってやや赤らんでいるものの、瞳には貫くような光が戻っている。

「けっ、生意気な目しやがつて。だが、その威勢がいつまで続くかな？ ……どれ」

男はそう言うした後ろを向き。

みしり……

アサギの臀部に腰を下ろしてきた。人間椅子の背中が撓み、少し沈み込む。

「おほう。こりゃいい……柔らかくて、すべすべで、あつたかくて、最高の椅子だ」

「……くっ……重いわよ、貴方……メタボ検診受けたらどう？」

アサギは男の尻の固い感触に眉を顰めて言った。

ゆさつ、ゆさつ……

「ふは、ははっ、いいぞおこれは……」

しかし、座る男は反抗的な態度を気にもとめずに、わざと体重をかけては揺さぶって、アサギの弾力を楽しむ。

「ん、こんなところに、なんだかいやらしい感じの穴があるじゃないか……くくく、物欲



しそうにひくひくしてるぞ。何が欲しいのかなあ？」

わざとらしい顔でアサギに振り向くと、秘唇をこつこつした指でつつく。

ぬりゅっ……

そして無遠慮に押し込んだ。指はずぶずぶと雌沼の中に呑み込まれていく。

「あっ、くっ……」

愉悅がアサギの背筋を走り抜ける。

「ほう、吸い付いてくるぜ。さっきあんなデカブツが入ってたから、もう一生ガバガバかと思つたが、なんだ、しっかり締まってきやがる」

「くっ、ふっ……心配してくれて、ア・リ・ガ・ト」

減らず口を叩いてはみたものの、指に充血粘膜を掻き混ぜられて、アサギの下腹部は甘い痺れで染められつつあった。

ぬぶっ、ぬじゅっ……ぐぶっ、じゅぶっ……

「いい音し始めたな、ククッ……なあ、何か入れて欲しいモノ、あるんじゃないか？」

「ふん。間に合ってるわ。う、くっ……」

嘲笑い見下ろしてくる男をアサギは睨み返す。しかし、執拗なまさぐりに、媚粘膜の疼きは早くも堪え難いものになりつつあった。それに加え。

（うう……まずいわ、おしっこが……）

アサギの膀胱に明確な圧迫感が生じていた。この部屋に連行されて、椅子として固定される際に、超強力利尿剤を投与されているのだ。この体勢で失禁したなら、自分の尿を顔

に浴びることになるのは明らかだった。屈辱の予感に、彼女の鼓動は速まってしまふ。

「なら、ここはどうか。おお、ざらざらだぜ」

そんな事情とは関係なく、男は指をフックのように曲げると肉中で動かす。

ぬぐりっ、ぐりぐりっ……ぬぼぼっ……

「つくあああああっつ！」

指がアサギのGスポットを乱暴に引つ掻いた。強烈な肉悦がアサギの身体を走り抜け、筋肉が反射的に収縮して背と腰が大きく跳ねて揺れる。

「うおっ、アブねえっ！」

反動で振り落とされかけた男が叫ぶ。

「ははははっ、エライ反応イイじゃねえか」「こりやよっぼどチンポが欲しいんだな」  
周りの男達がどつと笑う。

「じゃあこっちのデッカイのもイジってやるよ……すげえな、ホントに女かお前」  
一方、懲りない着席男は、もう片方の手で今度は勃起淫核を捕まえる。そして、  
ぎぢいっ！

そのまま力一杯ひねり潰した。

「やつやめあぎはあああああああっつ！」

アサギは白目を剥いて、言葉にならない悲鳴を上げた。がくがくと肢体を痙攣させる。知覚偽装が苦痛を全て快楽に変換するおかげで、暴力的なまでの虐悦が、身体を落雷のよう貫いたのだ。

「ぐはははっ、気持ちイイだろ、ほーらシコシコ、シコシコオオ……」

男は品なく笑いながら、巨大淫核を処刑する。

ぐぼっ、ぬぢゅっ、ぢゅぶりゅ……ぎぢぎぢぎぢぢっ……

「あぎっ、あがああああっ……来るっ、あひっ、クリっビリビリ来るのおおおっ!!」

アサギは苦悶から少しでも逃れようとするかのように、拘束された首と背中を精一杯仰け反らせていた。開いた口からは舌を突き出し、泡混じりの涎を零してしまう。

（でも駄目っ緩めちゃ、我慢しなきゃっ……!! おしっこっ……こんな格好で、おしっこなんてえええええっ!!）

「……おい、そろそろ入れちまえよ」「後がツつかえてんだぞ、後がよお」

周囲の順番待ちの連中が、さすがに痺れを切らして催促し始めた。アサギの悶える様子に、興奮を抑えきれなくなってきたらしい。

「ちっ……じゃ、ぼちぼちくれてやるか。そらっ」

「ふはっ、はあっ……あ……っ!」

指と入れ替わりに、熱く固い感触がアサギの発情器官に押し当てられた。

ぬぶるっ、ぬぶぶぶぶっ……

脈打つ雄棒はそのままアサギのぬかるむ粘膜の中に押し込まれてきた。反り返った弓なりの怒張が肉腔を擦っていく。

「んくっ、ふぁううつっ……」

変形屈曲位での挿入に、アサギは甘い声を漏らす。マシンデイルドよりはずっとまとも

なサイズであるものの、粗暴な前戯ですっかり発情させられていた彼女にとってそれは待望の刺激だった。体内を愚かしい歓喜が駆け巡る。

「ほう、こりゃいい穴だ。中でぐねぐね動いて、よく締めてくらあ……ふうっ、んほっ」  
ぬぐぐっ……ぐぶんっ！

男は一度引いてから、再び腰を強く落として剛直を深々と押し込んだ。

「っうああっ！」

アサギの雌椅子肉体も、押されて沈み込む。

（うう、尿意がっ……く、苦しいっ!!）

拘束対魔忍の膀胱に強い圧力がかかり、鈍く危険な愉悦が下腹部にずきずき響き渡る。

っぬぼぼっ……

男が腰を上げると、アサギの身体はバネのように戻る。

「いい跳ねっぷりじゃねーか。よし……」

その様子が気に入ったのか、ソファで飛び跳ねるやんちゃ坊主のごとく、男は腰を弾ませ始めた。

ぎししっ！ ぐぼぼっ！ みししっ！ ぬぶぶっ！

勢いよく怒張を撃ち込み、その反動で抜き去る。そして体重のままに再突入する。

「ははっ、くははははっ、それっそれそれっ！」

ぬぼっ、ぬぼんっ！ ぎしっぎししっ！

「あっ、あくっ！ 止めっらあああああっ！」

動きに合わせて、アサギの弾力に富んだ柔らかな身体が撓んでは戻る。普通の体位では刺激を受けにくい、背中側の粘膜が強くこそがれ、毛穴の開くような愉悅が流れ込む。

（くっ、こんな格好でっ……う、ううっ、揺らすなっ！ も、漏れそうなんだからっ!!）

大きな上下動のせいで膀胱が揺さぶられ、尿意が強烈に高まっていく。その危機感に、彼女に超強力利尿剤を飲ませた時の、臍の嘲り声が再生された。

『このお薬、すごーく効くの。ほっとくと脱水症状で死んじゃうかもね。お客さんに、おしっこ飲ませてっおねだりするといいわよ、アサギちゃん』

（の、飲む？ ふざけるな、そんなこと！ で、でも今、死ぬ訳には……ううっ……）  
生き延び、浩介を救い出すためには、飲尿屈辱を受け入れねばならぬのだろうか。苦悶の中でアサギは逡巡していた。

一方、男は夢中で腰を振り続ける。

ぎっ！ ぎしっ！ ぬぶっ！ ぬぼっっ！

「おお、おおっ、どんどん溢れてきたぞ！ だろだろ垂れてやがる……ふははっ！」  
びちゃっ……どぼっ、べちゅっ……

アサギの腹に胸に、顔にまで、出入りする雁首に掻き出された粘液が飛び散った。

「汁まみれになって、えらく気持ちよさそうな穴じゃねーか……早くブチこみてえ!!」  
「糞が。まだかよ……さっさと終わらせろや」

順番待ちの男達が待ちかねた様子で喚いている。

「ぐっ、我慢できねえ……一本抜いとくか、おう」

痺れを切らした何人かが、いきり立った粗暴器官を取り出してしごき始めた。

「ちえ、せつがちでいけねえな、ふっ、ふは……」

そう言いつつも、尻乗り男の動きが一段と速まった。弾んで戻るアサギの腰にカウンタ―を入れるがごとく、己の腰を打ちつけていく。

ぎぢぎぢっ！　ぬぼっぬぼぼっ！　ぢゅぶっぬぼっ！　みちつぎしっ！

（くうっ……ま、まずい……こんなにゆさゆさ、揺さぶられて、気持ちよくなつて……あああつ駄目っ……漏れちゃう、おしっこ漏れちゃうっ!!）

猿のような高速ピストンに、アサギの腹の奥から快楽の乱流が渦巻いて押し寄せる。膀胱は破裂寸前で、いつ決壊してもおかしくない状態だった。

パシッッ！

「あひあっ!!」

不意に尻を平手打ちされ、鋭い愉悅にアサギはあやうく括約筋を緩めそうになった。

「おらっ、もっと鳴けやっ！」

ピシイッ！　パシッッ!!

「あおっ、お尻っ！　ぶつたらあ、あっ、ひあっ、ああっ!!」

男は興奮のままに、大きく振りかぶつては、力一杯打ち据える。白尻に赤い跡がつく度に、鋭い被虐快楽がアサギの身体に響き渡った。

「はっ、いい顔だな。発情した雌犬の顔だぜ」「椅子にされて、すっかり感じてやがる」

自慰に耽る観客達が騒ぐ。その声援を受けて、尻に乗る男はラストスパートにかかった。

「うほっ、うほほおっっ！」

ぬぶっ、ぎゅぽっ、ぎしっみちっ！ ぱんっ、ぶぱんっ、みししっっ！

アサギを貫くペニスが、射精を予告して一回り大きく膨らむ。その時。

ぎゅぢいいいいいっっ！

再び男の手が勃起雌蕊をひねり潰した。

「あぎひ あああ あっああ あああ あっっっ!!」

「はははっ、イイ声だ……もつと鳴け！」

雌器官を挟られながら、チューブの中身を絞り出すがごとくクリトリスをしごかれる。気が遠くなりそうな魔悦が体内を駆け巡った。

「らっ、らめえええっ潰さないれっ！ らああらめっ出るっ出ちゃうっれちゃううっ!!」

過酷な処刑快楽にアサギの四肢が痙攣した。後頭部を拘束台に擦り付けるかのように頭を振る。腹筋と背筋が緊張し、貫かれた秘肉が強烈に収縮する。

「うほっ、ほほほおっ、凄え締めつけだっ！」

男は体液と汗でぬるぬるの雌尻の上で、獣のように激しく腰を振って肉音を響かせる。ぶぱんっ！ ぎゅぽっ！ ぱんっ！ ぬぶっ！

破裂寸前の膀胱に過酷な圧力が加えられる。

「あぎっ、ひあっ……らめっ！ も、もうっ、おしっこっ、おひっこ漏れひやおおっ！」

アサギは失禁への恐怖と、被虐への渴望に、我を忘れて叫んだ。

「ははっ、何だあ？ お漏らししそうなのかあ？」「しーしー、しーしー、ほらほらっ」

快樂と尿意にうち震えるアサギの様子に、男達が自身をしごきながら囃し立てる。

「ぬほっ、そうか、漏れそうなのか。ぬふふっ……よしそれなら、イクぞおおおっ！」  
つぶばああああっんっ……!!

止めとばかりに男が大きく腰を打ち下ろした。強い打突音とともに、アサギの股間から、子宮を、胃の腑を、喉を、脳天まで、快樂が貫いていく。

「いひっああああああああっっ！」

「喰らえっ、おおおおおっっ!!」

雌奥深くにのめり込んだ怒張は、ぶるぶると震え、そして迸らせた。

ぶびゅ、びゅるっ……びゅぽぶぶぶっっ!

茹だるような熱液を肉奥に浴びせかけられる。その雌の喜悦に、アサギも感極まった。  
「うああおおおっ……出てるっ熱いのっ、あああっわらひもっ来るっ来ちゃあああっ！」

身も世もなく叫ぶ唇は、惨めな笑顔を作るかのように引き攣る。縮み上がった瞳はあらぬ方を向き、眦から涙を零す。

アサギの全身が硬直し、のしかかる男を持ち上げんばかりに、下腹部を突き上げた。

……びしゅっ

アサギの戦慄く被虐勃起の付け根あたりに、わずかにきらめく飛沫が上がる。そして。

しゅわっ、ぶしやああああああっ!

噴き出すようにして、琥珀色に輝くアーチがアサギの股間から顔までかけられた。限界膀胱がついに決壊したのだ。



「ええあつ、らめつ出るつれちやうつ！ んぶはつ、ごはつ……おひっこおつ、気持ちいい……セルフしちゃあああつ!!」

雌器官の絶頂に加えて、解放の本能的な歓喜と、尿道からの痺れるような愉悅が、アサギの魂をぐらぐらと揺るがす。

じよおおお……！ ぴしゃびしゅ、びしよつ……

「おひよつ、漏らしやがったぞ、自分の顔につ！」「凄い勢いだぜ。嬉シヨンだな」「セルフ顔射はどんな気分だ？ 雌犬よお」

嘲笑う観客達の前で、アサギの胸に、顔に、髪に、自らの温かい雫が降り注ぐ。

（うあ、ああつ、温かい……しちゃった……私、おもらし、しちゃったあつ！ けほつ、んはつ、ああ、顔に、自分のがかかっている……く、口惜しい、恥ずかしい……でも……）

アサギは失禁恥辱に恍惚としながらも、利尿剤のことを思い出していた。

『……脱水症状を起こして死んじゃうかもね』

（の、飲まなきゃ、おしっこ……んくつ、あぶつ、んうつ……死んじゃうから……）

雌椅子アサギは口を開き、屈辱の雨を啜り始めた。苦みがかかった塩味が舌に広がる。

「おお、なんだよコイツ、自分の小便飲んでやがるぞ、ハハハハッ」

「よーし飲めよ！ こっちもブっかけてやるぜっ」

取り巻き達も握りしめたペニスを前へと突き出し、腰を震わせて射精し始めた。

ぶぶつ、ぶびゅびゅびゅつ！ びゅ、びゅうつ、びゅるるるつ!!

「ああ、あああつ、熱いつ！ んくつ、んむむつ……んはあつ、あつ、あああつ！」

自らの尿を浴び、飲み続けるアサギに、男達の白濁が降り注ぐ。室内に二種類の臭気が立ちこめる。

びゅぐつ、びゅるつ、ぶびゅびゅびゅつつつ！

「おおおおつ、チンポっ止まらねえっ！」「ションベンも止まらねえなあ、ははははっ」

醜く紅潮した顔で、血走った目を剥いた男達が、どろどろと精液を迸らせながら叫ぶ。

「もつと飲ませたるっ、ひやおおっ！」「精液まみれでいい顔だぜ、アサギちゃんよう」

ぶびゅつ、びゅるるつ、びゅうううっ！

じょろおおおおお……びしよつ、ぶしゅつ……

「んはっ、んぶっんんっ……んむううんんっ……」

男達の精液と自分の尿を啜り、呑み込む口唇からは、生温い惨めさと、それを圧倒する被虐の歓喜が染み込んでくる。頭の中が何も考えられないほど熱くなり、目の前が真っ白に塗りつぶされていく。

（あ、あああ……こ、こんな辱めで……自分のおしっこ飲まされてるのにつ、私っ!! 浩くんっごめんなさいっ浩くんっ！ だって気持ちいいのっ！ 私っ、こんなので、気持ちよくなっちゃってるのおおおっ!!）

彼女は恥辱絶頂に腰をがくと揺すり、胸に顔に蜂蜜色の湧水をまき散らし続ける。自重で潰れた乳房がわなわなと揺れる。

そして、失禁雌忍の膀胱が空になった頃、男達の浴びせかける欲望も一段落した。

「おおおう……ふう。なかなかいい椅子っぷりだったぜ。お前も気持ちよかったみたいだ



な、嬉ション飲尿までしてよう。く、くくくっ……」

胎内に注ぎ終えた男は、ぶるりと身震いしてペニスを引き抜くと、アサギから降りる。

(……ううっ……や、やっつと、終わり……!?)

ようやく絶頂から解放されたアサギは、豊かな胸を荒く上下させる。その顔はべっとり  
と精液と尿で染められ、瞳の光は弱々しい。だが、雌椅子に休息はなかった。

「ようっし、次は俺だぜ！ 待たされた分、楽しませてもらうからな」

みしりっ……

「くっ、あうっ……ま、またなの!!」

二番手が、空いたアサギに腰掛けてきたのだ。

「早くしろよ。次は俺なんだからな」「くそ、まだ先かよっ!」

見れば、男達は部屋の外まで列を作っているようだった。屈辱は果てしなく続く。

(……ま、負けるものかっ……! 必ず、必ず助けるんだから……浩くんっ……)

## 【5】

生け垣の裏に隠身したアスカの側を、数名の兵士達が歩いていく。男達は血、硝煙、その他様々な人体に由来する異臭をまわりつかせている。

ここ五車町は、対魔忍の本拠地であり、彼女がアサギ達と暮らしていた思い出の場所である。だが今や町は、悪名高い神田旅団に踏みにじられていた。

(……五車学園に兵士が集まってる。捕虜にされてる対魔忍がいるなら、あそこだわ)

アスカの網膜に、義肢のセンサーが捉えた赤外線画像が投影されていく。彼女の目は生

来のもののだが、情報伝達用の生体回線を付加されているのだ。

センサーの発見する警報機やトラップを回避しながら、彼女は音もなく進んでいく。

現在、戒厳令が敷かれた夜から既に四日が経過している。アスカは一旦は無理矢理帰投させられたものの、上司の目を盗んで無断出撃したのだ。

（抜け出すのに時間を食いすぎた……誰かいるなら、助けられるといいんだけど）  
やがて、五車学園の木造校舎が見えてきた。

†

（……！ さくらさん！ 紫さん！）

学園に潜入したアスカが見たものは、二人の知己の無惨な姿だった。

体育館の屋根の天窓から覗き込んでいるアスカの真下に、彼女達は全裸にされ、隣り合わせて四つん這いに拘束されている。滑らかな肌には赤いみみず腫れが無数に走り、突き上げた尻の中央にはグロテスクな性具が何本も突き刺さって、ぶるぶると振動している。

（ひ、酷い……こんなこと……）

アスカは憤怒に駆られた。

二人の両腕は後ろ手に縛られ、両脚は膝を横棒に固定されて開脚させられている。首には鉄の首輪を填められて、床に打ち込まれた杭に鎖で繋がれている。

薬物投与されたのだろう、二人の周りの床には注射器が何本も放り捨てられていた。

「も、もうらめえ……あ、あつああつ……さくらを虐めるの、もう止めれえ……」

「くっ……うううっ……止めろ、クスリ、もう止めて……射つなあ……っ……」

アサギに取り付いている他のオーク達も吠え立て、破裂するかのように射精し始めた。  
びゅっ、びゅぶうううううっ!!

両手の中で、水風船でも割れたかのような勢いで汚濁が弾ける。

どっ、どびゅっ、ぐぶるるるるるっ!! びゅぶるるるるるるっ!!

(んむっ、んはあっ、ぶつかってくるっ一杯っ! 豚っ精液っんふああああっ!)

全身に押しつけられていた豚ベニス達も、跳ねるようにして熱粘液をぶちまける。アサギの黒髪が、ブラウスが、胸元が、尻が、四肢が、悪臭を放つ粘液で先ほど以上にべったりと塗りつぶされていく。

そして、全身が雄豚専用の性器になったかのような至福の中で、アサギも絶頂した。

「んぶはあっ、んむあっ、ああおとおおっ……イイのおっ……皆のチンポっ凄いイイのおっ! もう、先生もっもう……っイっっちゃああっ!!」

白濁が脳にまで染み込んだかのように、視界がホワイต์アウトする。自我が愚かな幸福感にばらばらに粉碎されてしまう。

意味もなく、涙がとめどなく溢れ出る。

(私、今度はもう……戻れない、かも……だって幸せすぎて……何が悪いのか、何がイケナイのか、分からないの……! ごめんね、浩くん……皆……)

ちらりとアサギの心にそんな悔悟の念が過るが、すぐにそれも、どうしようもない多幸感に塗りつぶされてしまう。逞しい雄達に組み伏せられるという幸福に反発できるだけの理性は、彼女には残っていないかった。

ただ、胸の中の想いを吐き出したくて、粘液まみれの紅唇を一杯に開き、叫ぶ。

「んおっおチンポおっ、みんなの豚チンポっ気持ちいいのおおっ！ 幸せなのっ……私もうっ雌豚先生だからああっ!! あげるっ、みんなのおチンポっ百点あげちゃああっ!!」  
（アハ、アハハハッ、名実ともに豚になっちゃったわねアサギちゃん！ 最高よおっ!!）  
臍の嘲笑も届かぬまま、植え付けられた雌オークの本能のままに、アサギは恥辱絶頂を晒し続けた。

【3】

「んひおお、おおおおっ、おチンポっ！ おチンポっイイっ気持ちイイのおおっ!!」  
「止まないとっ、腰止まないとっ！ 気持ち良すぎてっ勝手に動いちゃああっ!!」  
「あはっあはああっ!! ぐぼぐぼするっ、ぐぼぐぼっ凄いつ身体中びりびりするっ!!」  
生臭い臭気の立ちこめる中に、女達の狂ったような叫び声が響き続けている。部屋の四方は脈動する不気味な軟体生物で覆われ、至る所で肉色の触手が這いずり回っている。

その中で、三人の裸女がのたうっていた。いや、果たして彼女達は『女』なのか。

「んあおおっ！ イイっ、凄いイイですっ中っぐじゅぶじゅでっ、みちみちでっ……」  
ぬぢゅっ！ ぐぱっ！ ぶぼっぢゅぱっ！

長い黒髪を振り乱しながら叫んでいるのは、対魔忍の中でも屈指の実力者、紫だ。

彼女は一抱えもある触手の塊を抱きかかえ、背中に筋肉を浮かばせて、激しく腰を打ちつけている。その股間には、女には存在しない筈のペニスが生えていて、これで触手塊を貫き、交わっているのだ。打ち込む度に、どろどろした粘液が隙間から溢れて跳ね跳ぶ。

「イイっつ、溶けちゃいそうに気持ちイイですうっ!!」

紫の表情は、まるで最愛の人への想いを遂げているかのごとき至福に溢れている。彼女の手は、絡み合う触手の塊を優しく愛撫していた。

紫の向かいでは、二人目の女が触手まみれの床に腹這いになって、弾むように丸尻をくねらせている。

「おチンポつぐりぐり、ごりごり、気持ちいいっ、さくら気持ちいいのおおっ!」

ぎゅぽっぎゅぬっ、ぐぶぶぶっ……

触手マットで床オナをしているのは、さくらだった。彼女は肉色の組織に覆われた床に、下腹部を押しつけるかのように腰を前後に動かしている。そこには紫と同様にペニスがいきり立っていて、擦り付けられるごとに抗い難い快楽を生み出すのだ。

床の軟体物は、ほどよい弾力を持った、指ほどの太さの触手が折り重なったもので、押しつけられたペニスをごりごりと圧迫愛撫してくれる。さくらは快楽に背筋を震わせつつ、なおも触手床に怒張を擦り付け続ける。

「んちゅっ、れるっ、んむっ……んはあっ……」

彼女は、まるで恋人に接吻するかのように触手に唇をつけ、先端に舌を這わせた。

その隣では、三人目が狂ったように叫び、ブリッジのように仰け反っている。

「凄いつ、凄いつおまんこっ、おまんこっずぼずぼするのっつ気持ちいいいいいいっ!!」

仰け反りながら悶え狂っている女は、アスカだ。全裸なので、両手足が義肢であることがはつきりと分かる。



やはり股間に隆々と見事なペニスを植え付けられており、それは天井から垂れ下がった、ぽつてりとした触手のコイルに銜え込まれている。

アスカは狂ったように腰を振って怒張を突き上げる。その度に豊満な乳房がだゆんだゆんに変形して揺れる。艶やかな髪の毛の頭が、ぐりぐりと触手まみれの床に擦り付けられる。

彼女が捕虜となったのは紫、さくらよりも後なのだが、その痴態は一番酷かった。

ぎゅぶつ、ぎゅぶつ！　ぐぶつ！　がぶつ！！

アスカが狂ったように腰を突き上げる度に、触手コイルの筒状の先端からペニスの頂点が見え隠れする。粘液がぱらぱらと飛び散る。

「気持ちイイっ、このおまんこっ、ぐねぐねしてっ吸い込んでっあああっ凄いつ！！」

肉コイルは太い触手が幾重にも絡み筒状になったもので、ペニスを押し込むと、本物の女性器の肉襞さながらに掻き分ける愉悅が伝わってくる。

「擦れるっああっ……アスカのおチンポにつかりかりっ、かりかりっ来てますううっ！！」

アスカが腰を引く。コイルの内側には無数のイボが密生していて、引き抜く時には亀頭冠にこりこりと擦れ、焼け付きそうな歓喜がもたらされる。

「あっ、出る、出るうっ！！　あああああっまたっ精液出るっ！　気持ちイイのっ……出ちゃいますううっ！！」

複雑な触手コイルが生み出す強烈な快楽により、少女はあっという間に絶頂へと追いやられた。恥知らずに叫び、勢いよく腰を突き上げると。

びゅるっ……びゅるるるるっっっ！

コイルの先端から顔を覗かせた。ペニス、肉色の空間に純白のアーチを打ち上げた。  
ぶびゅつるるるるつっつ!!

濃厚な白濁は、仰け反って震えているアスカの乳房や顔にびちゃびちゃと落ちていった。  
これが最初ではないのだろう、彼女の顔は既に白い粘液まみれだ。

ほぼ同時に、他の二人も射精を開始した。

「んほっおおっ、おおっ、出るっ出ますっ紫の、おおっおちんぼっ射精ええっ!!」

「あっあああつまた出るっ、さくらっ床オナでまた精液びゅうびゅうしちゃううっ!!」  
ぶびゅうううううっつ!

紫が抱き貫く触手の塊の隙間から、彼女の放った白濁液が、夥しく漏れ迸ってくる。

びゅぶつぶりゅるるるるるっつ!

触手床オナをしているさくらの腹の横から、乳房の間から、溢れた精液が噴出する。

「うあ、あああああつ! 止まらないっつ……まだっまだ出てますうううっ!!」

びゅるっ、びゅるるるるっつ!

卑語を叫び、射精する彼女達の目はどろりと暗く淀んでいた。三人とも、生やされているペニスの上の恥丘に、黒いハート形の刻印がある。アサギと同じ、催眠刻印による支配の証である。

そして、触手まみれのこの部屋には、狂態を晒す彼女達の他に二つの人影があった。

朧と『魔科医』フルストだ。

「移植ペニスは気に入って頂けたようですね。皆さんの喜びの姿は、魔科医として何より



の報酬です。くくくっ」

でっぷりと醜い魔族は、満足げな顔で言う。

「まったく、対魔忍どもときたら、オークの豚チンポを移植されて大喜びだなんて……どいつもこいつも呆れた雌豚ね……アハハハハッ！」

真性サディストは耳障りな声で嗤<sup>わら</sup>うと、ずかずかと触手床を歩いてアスカに近づく。

ズガッ！

ブーツでアスカの額を踏みつけた。

「特にこの小娘！ 処女なのにオナホ狂いなんて、一体世の中、どうなってるのかしらね……ウブプププッ」

ブーツがぐりぐりと額を踏みにじるが、アスカは全く意に介さず自慰に耽溺し続ける。

「もっとっ、もっと精液っ搾ってええええっ！」

「そう言えばコイツだけは、豚じゃなくて別のチンポだっけ？ じゃあ、その分相性イイのかしらね」

フュルストが肩を竦めながら言う。

「ま、そちらは色々ありましたからね。それはともかく、知覚偽装の強化は成功ですな。この方々が最初からどうしようもない淫乱だということを差し引いても、ね」

因われの対魔忍達は、交わっている触手を人間の女性だと誤認識させられていた。無論、臍やフュルストの存在も認知できていない。外部世界の情報が検閲され、丸ごと偽装されてしまっているのだ。

アサギに施されたもののように感覚を入れ替えたり、快楽を増大したりするだけではない。これが、心を弄ぶ邪悪な技、フルストの開発した知覚偽装の完成形だった。

と、魔科医が表情をやや改めた。

「そうだ隴さん、そのアスカさんなんですが」

「何？ フルスト」

「彼女の義肢が、十分に分析できていないのですよ。いえね、武装や駆動系は分かります。硅素系人工筋肉、ミサイルが残弾三発、他にブレードとマシンガン」

フルストは再び肩を竦める。

「ですが、制御系がブラックボックスのままです。どんな機能があつて、それはどう使われるのか。分析は次の試合には到底間に合いそうもありません。手首に内蔵されている電極も機能不明ですし」

だが、隴はその話題に興味がなさそうだった。つまらなそうな声で返す。

「ふうん。その何が問題なの？ どう反抗しようが、私はこいつら全員、催眠刻印で好きなように操れるのよ。何なら、生きた盾にだってできる」

†

隴達の傍らで、歪んだ幻覚世界に閉じ込められた対魔忍達が痴悦に苛まれ続けている。

ぶぼっ、ぐぶっ、がぼっ、ぎゅぶっ……

「イイっ、おまんこイイですっ……！ おチンポっ絡み付いてっ、吸い取られるみたいでっ、脳みそ溶けちゃいそうに気持ちイイですううっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

**二次元  
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

**二次元  
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

**リアルドリーム文庫**

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

**あとみっく文庫**

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





**キルタイムのアダルトコミック誌!**

**業界唯一！エロラノベ&エロコミック満載！！**



魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌！



**KTCといえば闘うヒロインアンソロ!**



**詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!**

キルタイム

檢索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。